

サントの倍音チャクラ瞑想

Santo's Overtone Chakra Meditationa



倍音ハーブを弾くスワミ・チェタン・サント

スワミ・チェタン・サントは一九八四年一月にサニヤスを取りました。当時、彼はハンブルグの某保険会社の法律顧問をしていました。ギターとタンブーラの演奏にかけては玄人肌だったのですが、いつも何か、努力なしで弾けるような楽器がないかと捜していました。そして一九八五年、友人に一弦琴を見せられたのです。一弦琴というのは古代ギリシアの楽器で、ピタゴラスがこれを使って学生たちに幾何学の法則を教えたりしていました。この楽器はサントに、瞑想的な音楽の新局面をもたらしました。「生まれて初めて、ただ目をつむって音楽の中に落ちていけるようになったんです」-----サントは言います、「もう夢中になりました。いろいろ弾きながら、一本づつ弦を増やしていったんです。そして倍音ハーブができあがりました」。以来、サントは七つのハーブを作りました。ひとつ仕上げるのに、二か月から三か月かかります。

このハーブでいろいろ実験した結果が、今回のチャクラ瞑想テープの録音です。これはチャクラのための音楽的な旅路です。その録音は最初、彼の家の裏庭でおこなわれました-----朝、小鳥のさえずりを伴奏に.....。「この瞑想は、第一チャクラから第七チャクラへの旅です。必要なことは、ハーブの音楽に導かれるままに、ただ各チャクラへと息を吸い込み、意識のすべてをそこに注ぐことです。ときには、息を吐き出すときに音を出したいと思うかもしれません」-----サントは説明します-----「倍音ハーブには五十本の弦があって、すべて同じトーンなんです。ちょうど、微妙な音の花輪の中に基本トーンがいくつも花を咲かせていくような感じで、それによって自分の内側に深く深く入っていきます。でもそれに抵抗したら、そんな音もすぐ邪魔になってしまう！」

和尚スクール・フォ・ミスティシズムのディレクターであるスワミ・デヴァ・ワドゥウは、一九八七年にハンブルグを訪れたのですが、そのとき、サントの音楽を聴いて、いたく感動しました。そしてプーナに帰ってから和尚に質問を出しました。

すると和尚は答えました-----サントをプーナに呼んだらいい、倍音ハーブをもっておいでと-----。そして和尚は、チャクラ・ミュージックテープを聞くと、こんなふうに言いました。「きっとこれは瞑想の大きな助けとなるだろう」サントは言います、「和尚が肉体を離れたとき、こんなふうに感じたんです-----今こそこの音楽の本格的なレコーディングをしよう、そしていつでも誰でも使えるようにしましょう」。そしてスワミ・サンギート・オムに手伝ってもらって、プロ用のスタジオでレコーディングをしました。湾岸戦争の真最中、ハーブを持ってプーナへ行こうとしたら、フランクフルト空港で、機関銃を持った四人の公安係官にチェックされました。「誰もこんなものは見たことがなかったんです。だから変なふうに疑われちゃって」。ともあれ彼も楽器も無事に到着し、オーディオ・スタジオに到着したというわけです。そして彼の倍音チャクラ・テープは、サダナ・ファウンデーションから発売の運びとなりました。